

北京天寧寺塔と慈寿寺塔に見る「古典」意識とその意図

水野 さや

The View about the Succession with the Shape of Pagoda and its Aim considered through the Tiānníngsītǎ and the Cǐshòusītǎ in Beijing

MIZUNO Saya

はじめに

仏塔における「古典」の意識とは、いわゆる「瑞塔」であり、特定の付加価値をもつ霊験あらたかな、効力の強い塔と認識して良いであろう。「瑞塔」と認識されるものにはいくつが存在する。例えば、釈尊の八大仏跡に関わるいわゆる八大霊塔もそれにあたるであろうし、隋文帝が全土に建立させた「仁寿舍利塔」もそうである。

本稿の概要を先に述べるならば、金代に先行する華北の唐塔・遼塔に見られる特徴を、いったん別の目的で採用したところ観面な効果が得られたため、それが「古典」すなわち「瑞塔」に準ずるものとしての認識が成立し、そのために今度はそのかたちを模した塔の発生を促したという理解を、ともに北京市内に位置する天寧寺塔（北京市宣武区、八角十三層密檐式塔、遼代創建・金代重修、図1-1-4）および慈寿寺塔（北京市海淀区、八角十三層密檐式塔、明代、図2-1-1-3）を題材とし、その概要をまとめることである。

天寧寺塔は、遼の天慶十年（一一二〇）の建立である。しかし、創建時においては、当時の燕京の一般的な遼塔のように、第一層塔身に浮彫尊像はなかったと推測される。ところが、金の大定二十一年（一一八一）、世宗（在位一一六一―一一八九）の治世に天寧寺塔が

重修されるに際し、塔身部の浮彫尊像が追造された。そしてここには、先行する華北の唐塔や遼塔と共通する特徴を見出すことができる。当時の金の国内事情を考えると、契丹人、漢人、渤海人など、支配下にある諸民族を懐柔し、国内の融和・安定を図ることが急務とされていたため、天寧寺塔金代重修時における華北の唐塔・遼塔を思わせる浮彫尊像の追造は、民族問題に対する一種の融合策と考えられよう。そして、結果的に、このような天寧寺塔重修の効験か否かはさておき、約一一二〇年の金朝（一一一五―一二三四年）にあって、世宗の治世は、最も隆盛した時代となったことは事実であろう。

このことが、後に天寧寺塔に見られる造形、すなわち、華北の唐塔・遼塔の特徴を合わせたようなかたちの塔を「瑞塔」、「古典」と認識させるに至り、明代の慈寿寺塔のように、「天寧寺隋塔摹也」と言われるかたちの塔の建立を招いたと考えたい。そして、この「古典」、霊験あらたかな塔のかたちと認識されたかたちは、どのような目的に対して高い効果を保証する「瑞塔」であったのか。それは、唐代以降、五台山を中心に広まった仏頂尊勝陀羅尼の信仰と関連するものであり、仏頂尊勝陀羅尼の効力を最大限に発揮するに適したかたちであったと言えるであろう。

天寧寺塔

八角十三層密檐式磚塔の天寧寺塔は、現高五七・八メートルである。双輪部・塔身部・基壇部からなるが、現状において双輪部は当初材を欠失する。天寧寺についてはすでに別稿において述べている（水野、二〇一四年）。後述する慈寿寺塔の考察に必要な点のみ、再度要点をまとめると、次の通りである。

天寧寺塔は、遼の天慶十年（一一二〇）の建立であるが、創建時の段階においては、当時の燕京の一般的な遼塔のように、第一層塔身に浮彫尊像はなかった可能性が高い。尊像の彫刻技法および塑像の中に遼代の建築塼が混在していることから、金代の造像と推測される。すなわち、金の大定二十一年（一一八二）、世宗の治世における天寧寺塔重修時において、第一層塔身の尊像が追造されたと考えられる。さらに、明代に補修が為されているが、尊像の表現から判断すると、原型は比較的保たれたようである。また、一九二〇年代の天寧寺塔の様子（図5）を見る限りにおいて、明・清代に修理を受けた後、少なくともこの時点までは、手を加えられていないことが知られる。

天寧寺塔のように、第一層塔身に尊像を配し裝飾する特徴は、雲居寺南塔（遼・一一一七年頃、図8）など、燕京周辺の遼塔よりはむしろ、先行する華北の唐塔や遼塔と共通する特徴が合わせて見出せる。先端を尖らせ宝珠型とする門扉拱輪部は、隋・唐代の塼塔・石塔においては多数認められる。また、このように塔身部第一層が龍や守護尊像により賑やかに荘厳され、かつ、門扉上部の拱輪部が尖った形をもち、昇り立つ龍を表す塔は、例えば、山東省済南市の、開元五年（七一一）建立の神通寺小唐塔（図4）などにも見られ、靈巖寺の龍虎塔（八世紀、図3）においては、門扉拱輪部上に如来像、左右に飛天、門扉の左右に力士像を配するなど、塔身部が数多くの浮彫

モチーフにより荘厳されている。このような構成を取り入れ、門扉の形や龍のモチーフなどにより華やかに荘厳する天寧寺塔の様相は、華北の唐塔との造形的つながりを想起させるものである。

また、塔の外景を見渡せば、崇興寺東・西塔（遼寧省北鎮市、図6）、遼陽白塔（遼寧省遼陽市、図7）のように、遼寧省に現存する多くの遼塔は、第一層塔身の各面に仏龕を設け、天蓋を掲げ、左右に飛天が飛翔する形式をとる。天寧寺塔はこの構成に影響を受けたものと言える。

なお、世宗は即位前に、済南尹および東京留守（貞元三年（一一一五））、在遼陽府六年）を歴任しており、契丹人の故地とのつながりがあるが、生母李氏（世宗即位後、貞懿皇后に追封）は遼陽の豪族、渤海人であり、父完顔宗輔没（一一三五年）の後に出家し、遼陽に居を構えていた。また、世宗即位の後ろ盾となった李石（尚書令、世宗の叔父、生母貞懿皇后の弟）、張玄徴（瀋州樂郊県主簿、妻高氏は貞懿皇后の親縁）、張汝弼（尚書左丞、張玄徴の子）がいずれも遼陽の渤海人豪族であった。

海陵王の南伐における契丹人・渤海人の強制的徴兵、軍馬兵糧の強制的徴発などこれまでの処遇に対し、彼らは大いに不満を募らせてきた。『金史』巻五（本紀第五、海陵）を概観すれば、正隆六年（一一一六）の五月に「契丹諸部反」、同卷六十九（列伝第七、太祖諸子宗敏）においても、同年七月に「契丹撤八反」の内容を見出すことができる。このように、契丹人による叛乱が相次ぎ、また、正隆六年七月の「殺亡遼耶律氏宋趙氏子男凡百三十余人」などの出来事から宋遺民（漢民族）の反感も高まっていた当時の国内情勢のさなか、正隆六年（一一一六）十月、遼陽にて即位した世宗に課せられた急務は、必然的に、契丹人、漢人、渤海人など、支配下にある諸民族を懐柔し、国内の融和・安定を図ることであった。その一環として、

天寧寺塔金代重修時における華北の唐塔・遼塔を思わせる浮彫尊像の追造が画策されたと考えている。

塔の建立・修繕、仏頂尊勝陀羅尼により得られる功德

すでに別の機会に述べたが（水野、二〇一三・二〇一五年）、特に遼代の塔は、その内に様々な宝物（例えば、仏頂尊勝陀羅尼經幢〔一切の如来の全身舍利〕、高僧・王族の遺骨〔僧舍利〕など）を納入するに留まらず、外に様々なモチーフ（八大靈塔・佛像・宝塔・經幢・法偈〔法舍利〕など）により荘嚴することにより、仏頂尊勝陀羅尼の効力を最大限に發揮する「器」としての側面が強い。塔の外側を荘嚴することで、効率よく視覚化し、より顕著化して、功德を保証する効果的な手段であったと言える。また、この関係性を保証する教理的システムの背景には、如来の真身舎利の他に經典や佛像などの法舎利を用いても効力の高い仏塔建立が可能であるとし、その効力を保証する七世紀後半の仏陀波利記『仏頂尊勝陀羅尼經』、八世紀後半の不空訳『一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經』などの、華北、五台山を中心とした受容と流行が挙げられる。

弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼經』唐（八世紀初）においては（傍線は著者による）、

有古仏塔。於中現有如来舍利。其塔崩壞汝必往彼重更修理。及造相輪樣写陀羅尼。以置其中興大供養。（中略）令汝命根還復增長。久後寿終生極樂界。於百千劫受大勝樂。（中略）当持呪本置於塔中供養此塔。或作小泥塔満足七十七。各以一本置於塔中而興供養如法作已。命欲尽者而更延寿。（『大正』二四一七八中）

とあり、仏塔を修理し、多数の小塔を造り、供養することにより、寿命は延長し、寿終の後は極樂往生を遂げられると説く。

また、仏陀波利記『仏頂尊勝陀羅尼經』唐（七世紀後半）においても（傍線は著者による）、

此陀羅尼於瞻部洲住持力。（中略）若有受持誦誦是陀羅尼者。我常隨逐守護。不令持者墮於地獄。以彼隨順如来言教而護念之。爾時護世四天王。（中略）短命衆生還得增寿。永離病苦一切業障悉皆消滅。（中略）若常誦念得大涅槃。復增寿命受勝快樂。捨此身已即得往生種種微妙諸仏刹土。（『大正』一九一三五一上～下）

とあり、仏頂尊勝陀羅尼の功德とは、瞻部洲（人間界における）における寿命の延長、増福、種々微妙な諸仏の浄土への死後の速やかな往生などを保証するものである。

このような仏頂尊勝陀羅尼の効力を最大限に發揮する容れものとして、その相応しい立地に仏塔は建立される。『仏頂尊勝陀羅尼經』によれば（傍線は著者による）、

若人能書写此陀羅尼。安高幢上。或安高山或安楼上。乃至安置卒堵波中（中略）諸供具華鬘塗香末香幡蓋等衣服瓔珞。作諸莊嚴於四衢道造卒堵波。安置陀羅尼。（『大正』一九一三五一中）

とある通り、高山、楼上、都城の四隅とする。これが遼塔・金塔の立地に影響を与えている。遼寧省朝陽市の都城内には、現存する朝陽北塔および朝陽南塔の他に、かつては東塔の存在が報告されている。また、遼代の燕京都城における天寧寺塔は、都城内西側に位置し、城内四隅の一塔と認識されていたかもしれない。

金が燕京に遷都し、中都を建設したのは一一五三年である。その当時の天寧寺は、中都城内において皇城の北面に接する重要な位置を占めるようになっていた。中都における主要寺院であるがゆえに、この地域における一般的な遼塔・金塔のかたち、すなわち、塔身に浮彫尊像を多く伴わない塔の形が採用されていないことは、大いに留意すべき点である。

慈寿寺塔

八角十三層密檐式塔の慈寿寺塔は、現状において高さ約五〇メートルである。二〇一四年調査時、周辺は玲瓏公園として整されており、寺址の礎石などを確認することはできない。塔は双輪部・塔身部・基壇部からなるが、現状において当初の双輪部は欠失している。

第一層塔身の構成について見てみると、隅柱は龍柱（昇・降）とし、柱頭は、亀甲文帯を挟み、その上に二童子を伴う白衣観音（衣を頭部から被る）を表す。東・西・南・北の四面には、中央に門扉（先端が宝珠型に尖る）、その左右に力士立像、その上に扁額を設ける。東南・西南・西北・東北の四面には、中央に窓（先端が宝珠型に尖る）、その左右に菩薩立像、その上に菩薩坐像を配する。

雲文の縁取りをもつ扁額には、南面（塔の正面）に「永安万寿塔」、西面に「輝騰日月」、北面に「真慈洪範」、東面に「鎮静皇図」を刻す。それぞれの門扉拱輪部は、周辺を雲文で縁取り、その内区中央には龍が正面観で表され、内区左右の下端に山岳文、そこから上昇する龍を配し、背後を雲気で埋める。門扉の左右に立つ力士像（二対）は、雲座上に立ち、体側から頭上に懸けて雲気をまとう。なお、これらの力士および菩薩像の周囲に塑造により取り付けられる雲の表現には、二手が看取でき、明代重修後に修理を受けていることが推測される。

東南・西南・西北・東北面の窓は、周辺を蔓草文で縁取り、その内区中央には龍が正面観で表され、左右前脚を開き、爪を立てて身構える。背後は蔓草で埋め、中央の龍の左右下に、龍が蔓草と絡まる様子で表される。またその左右下に、内区左右下端から順に、岩座上に象、蔓から生じた蓮華上に獅子、同じく蓮華上に山羊を表す。窓の左右に立つ菩薩立像（二対）は、雲座上に立ち、体側から頭上に

懸けて雲気をまとう。菩薩立像は、確認できる限りにおいては、胸前で合掌ないし拱手とする像と、胸前に両手を挙げて持物（華盤や香炉など）を捧げ持つ供養の菩薩像である。窓上の菩薩形の坐像は、雲中に配され、それぞれ腹前で定印ないし供物を持つ。これらの菩薩坐像は、ふっくらとした面部の表現、なで肩でありながら身幅のある体軀など、明代の造像に認められる要素を持つことから、これらの彫塑像が明代に造られた後に、修理を受けているものの、比較的原形は保たれていることがうかがえる。

また、第一層塔身の軒下に、両端に神将像、その内側に菩薩像、その内側に仏坐像七軀を連ねて表す。その下に、中央に如意宝珠を挟んで、左右に龍を三頭ずつ表す。

慈寿寺塔は、詳細な尊像構成は天寧寺塔とは異なるものの、全体的な印象として、金代重修時の天寧寺塔への意識がうかがえよう。このことは、慈寿寺塔を明代における天寧寺塔の模塔とする記述があることから示される。

崇禎八年（一六三五）序の『帝京景物略』巻五によれば（傍線は筆者による）、

万曆丙子慈聖皇太后為穆考薦冥祉神宗祈胤嗣卜地阜成門外八里建寺焉寺成賜名慈寿（中略）有永安寿塔塔十三級崔巍雲中四壁金剛振臂拳髻努睨據踏如有氣吞吞吐吐有聲天寧寺隋塔摹也

と記されるように、慈寿寺は、万曆丙子（一五七六年）、先帝穆宗と神宗のために慈聖皇太后（慈聖宣文皇太后、孝定太后）により建立が発願され、十三層の永安寿塔（慈寿寺塔）も同時に着工された。朱彝尊による『日下旧聞』（十七世紀）を原本とし、乾隆三十九年（一七七四）勅撰の『日下旧聞考』巻九十七に「慈寿寺左阜成門外八里宣文皇太后所建咸于万曆六年秋殿宇壯麗暮鐘出雲漢四壁金剛像如生」とあることから、慈寿寺塔も二年後の万曆六年（一五七八）に完工したことが知られる。

塔の四壁に金剛力士像が配され、その拳を振り上げる力強い様について触れられている。そしてこの塔が、天寧寺の隋塔（創建が北魏時代に遡る天寧寺には、隋代にも塔が建立されていた。しかし先述の通り、現存するのは遼代創建・金代重修の塔である）を模した塔とみなされている。

慈寿寺塔建立の目的としては、先帝穆宗を供養し、神宗の長寿を祈願することであった。すなわち、短命であった穆宗隆慶帝（在位一五六七―七二）に代わり、皇位を継いだ我が子神宗万暦帝の長寿と政権安定を強く祈願しての仏塔建立と考えられる。

隆慶帝は、嘉靖帝の第三子として生まれ、嘉靖十八年（一五三九）に裕王に封じられている。嘉靖帝の晩年は、内政の乱れの他に、「南倭北虜」と称される倭寇とタタールによる侵攻にさらされていた。即位した隆慶帝は嘉靖期の弊政を改革すべく、海外貿易を開放し、倭寇、タタールに対してある程度の貿易を認める柔軟策を採らざるを得なかった。神宗万暦帝（在位一五七二―一六二〇）は、隆慶二年（一五六八）に六歳で立太子され、隆慶六年（一五七二）に十歳で即位する。しかし、孝定太后の祈願もむなしく、万暦帝の治世は文化的には爛熟期を迎えながらも、明朝退廃の加速を早めたことは、周知の通りである。

ところで、孝定太后（慈聖皇太后）は灘県（現在の河北省通県）の人とされる。穆宗隆慶帝の即位前、裕王のときの宮人であった。隆慶元年（一五六七）三月、貴妃に封じられる。孝定太后は仏教崇拜に篤く、慈寿寺の他に万寿寺、長椿寺などを建立し、房山雲居寺の舍利三果を供養したことが知られている（『明史』、『帝京景物略』等）。また、『帝京景物略』巻七には、潭柘寺（北京市門頭溝区）における太后の次の様な内容が記されている。

拜磚元妙巖公主持觀音文礼大士拜痕入磚欲穿也額手足五体皆印
歲久磚壞兩足痕存万曆壬辰孝定太后匣取入覽後遂匣藏之

すなわち、潭柘寺には、出家してこの寺に入山した元の妙巖公主（フビライの息女）の拜磚があるが、この拜磚には幾度とない礼拝によって刻まれた公主の額・両手・両足の五体の痕があった。年月が経ちこの拜磚は破損していたけれども、公主の両足の痕だけは残存していた。そこで、万暦壬辰（一五九二年）、孝定太后はそれを匣に取り入れて御覧になろうとしたという。孝定太后が妙巖公主の足痕が残る拜磚に感銘を受け、尊崇していた様子がうかがえる。

以上のように、孝定太后による古寺・古塔の修繕と建立、舍利の奉納等は、前述した仏頂尊勝陀羅尼により得られる功德に通じるものと理解できよう。その際に、最もふさわしい塔のあり方として、天寧寺の模塔が認識されていたと言える。すなわち、天寧寺塔に認められる塔のかたちが「瑞塔」、一種の「古典」として認められ、活用されたものと推測される。同じく北京市内に位置する明（一四八四年）の通州佑勝教寺然灯塔（北京市通州区、図9）など、通常の明塔は、ラマ塔形式の塔を除けば、この然灯塔のような構成になることが大多数である。その中において、慈寿寺塔の違いは明白であり、明らかに、金代重修時の天寧寺塔への意識がうかがえよう。

なお、慈寿寺塔が完成する十八年前には、タタールのアルタン・ハンが北京に侵攻し占拠する、いわゆる庚戌の変（一五五〇年）が起きている。それから約二〇年間、万里の長城の侵入が繰り返された。まさに、オライトによる侵攻を受け、正統帝が捕虜とされた土木の変（一四四九年）以降、再び、北京の北辺が騒がしい状態であった時期に当たる。またこの頃、例えば、嘉靖年間の成立とみられている『楊家将演義』など、宋の將軍が遼（契丹）を滅ぼすという、史実とは異なる漢民族王朝による異民族征伐の物語の編纂が進んだ頃でもある。中国の伝統「夷を以て夷を制す」ではないが、そのような時代背景が、慈寿寺塔建立における金代天寧寺塔への意識にあつたのではないかと考えている。

ところで、天寧寺塔と慈寿寺塔は、実際には一致している箇所より相違点が目につく。厳密には「模した」と言うよりはむしろ、天寧寺塔のような様々なモチーフにより荘厳された仏塔を意識したという程度に留めておく方が良いかもしれない。ただし、先述の通り、このような構成の仏塔自体が北京市とその周辺地域においては希であり、天寧寺塔の存在を際立たせているため、このような塔を建てることそのものに意味があったことは間違いないであろう。

付記

本稿は、平成二十八年度科学研究費補助金よによる学術研究「高麗の仏塔・仏像にみる遼・金の影響に関する調査研究」(基盤研究(C)、研究代表者・水野さや)の成果の一部である。

(みずの・さや 芸術学／東洋美術史)

(二〇一六年一月三十一日 受理)

主な参考文献

- ・張廷玉等撰『明史』中華書局、一九七四年
- ・脱脱等撰『金史』中華書局、一九七五年
- ・劉侗・于奕正撰『帝京景物略』北京古籍出版社、一九八二年
- ・于敏中等纂『日下旧聞考』北京古籍出版社、一九八三年
- ・常磐大定・関野貞『支那佛教史蹟』評解五、佛教史蹟研究会、一九二八年
- ・村田治郎『満州の史蹟』座右宝刊行会、一九四四年
- ・竹島卓一『遼金時代の建築と其佛像』龍文書局、一九四四年
- ・野上俊静『遼金の仏教』平楽寺書店、一九五三年
- ・外山軍治『金朝史研究』同朋社、一九六四年
- ・今井秀周『金朝の宗教政策』、『東海女子短期大学紀要』第一二号、一九八五年
- ・松木民雄『北京・慈寿寺塔と李太后』、『北海道東海大学紀要』人文社会科学系第一〇号、一九九七年

- ・松木民雄『北京・天寧寺塔』、『北海道東海大学紀要』人文社会科学系第一五号、二〇〇二年
- ・佐々木大樹『仏頂尊勝陀羅尼経幢の研究』、『智山學報』五七号、二〇〇八年
- ・水野さや『遼代朝陽北塔に関する考察』、『金沢美術工芸大学紀要』第五七号、二〇一三年
- ・水野さや『北京市周辺における遼塔の第一層塔身荘嚴モチーフについて―北京天寧寺塔再考の第一段階として―』、『金沢美術工芸大学紀要』第五八号、二〇一四年
- ・水野さや『北京天寧寺塔について』、『密教図像』第三三号、密教図像学会、二〇一四年
- ・水野さや『遼・金代仏塔の特徴とその機能』、『国際シンポジウム Frances and Frangings in a transdisciplinary perspectiveにおける』頭発表、二〇一五年三月、於 学習院大学



图 1-1 天寧寺塔



图 2-1 慈寿寺塔



図1-2 同 第一層塔身 南面



図2-2 同 第一層塔身 南面

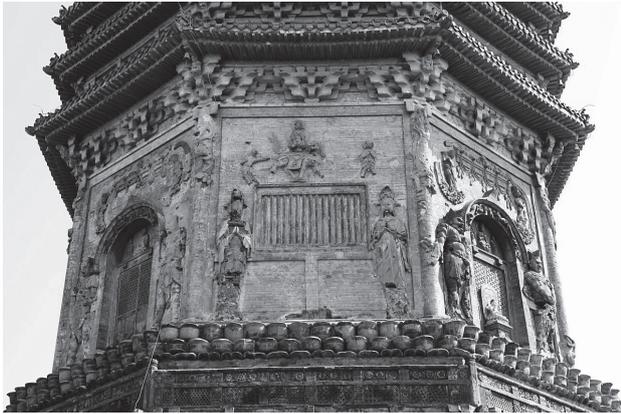


図1-3 同 第一層塔身 西南面

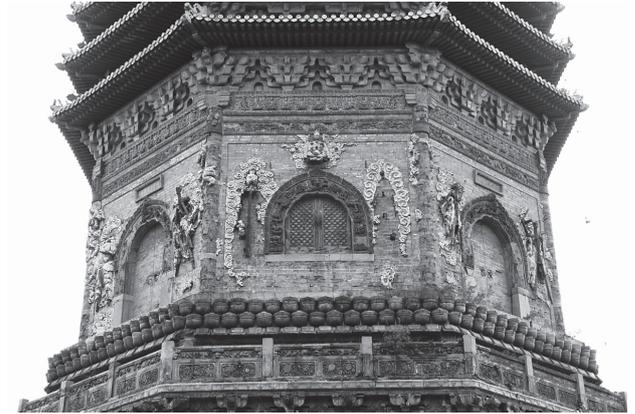


図2-3 同 第一層塔身 西南面

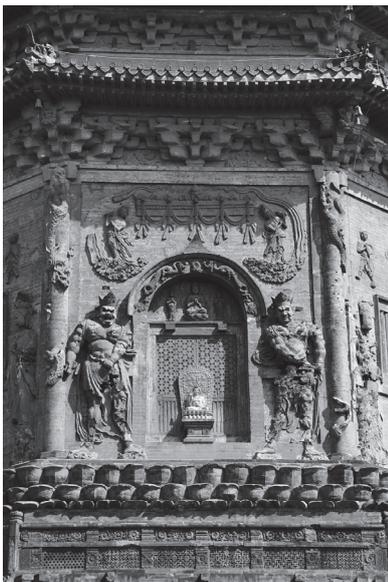


図1-4 同 第一層塔身 南面



図3 靈巖寺龍虎塔 第一層塔身
唐(8世紀)



図4 神通寺小唐塔 第一層塔身
唐(717年)



図5 天寧寺塔
(['支那佛教史蹟』より)



図6 崇興寺東塔 遼 (12世紀)



図7 遼陽白塔 遼~金 (12世紀)



図8 雲居寺南塔 遼 (1117年頃)
(['支那佛教史蹟』より)



図9 佑勝教寺然灯塔 明 (1484年)

